

報告

## 筑波大学における「院生プレゼンバトル」の事例報告 ～学園祭における科学コミュニケーション～

石田 尚<sup>1†</sup>, 善甫 啓一<sup>2†</sup>, 上道 茜<sup>3†</sup>, 松原 悠<sup>4</sup>, 埴生 孝慈<sup>5</sup>, 尾澤 岬<sup>6†</sup>,  
天野 千恵<sup>7†</sup>, 榎田 翼<sup>2†</sup>, 佐藤 翔<sup>5†</sup>, 西浦 ミナ子<sup>5†</sup>, 赤瀬 直子<sup>8†</sup>,  
三波 千穂美<sup>9</sup>, 逸村 裕<sup>9</sup>, 山田 信博<sup>10</sup>

"Presentation Competition of Graduate Students" at the University of Tsukuba  
-Science Communications at a University Festival-

ISHIDA Hisashi<sup>1†</sup>, ZEMPO Keiichi<sup>2†</sup>, UEMICHI Akane<sup>3†</sup>, MATSUBARA Yu<sup>4</sup>,  
HANYU Koji<sup>5</sup>, OZAWA Maisaki<sup>6†</sup>, AMANO Chie<sup>7†</sup>, ENOKIDA Tsubasa<sup>2†</sup>,  
SATO Syo<sup>5†</sup>, NISHIURA Minako<sup>5†</sup>, AKASE Naoko<sup>8†</sup>, SANNAMI Chihomi<sup>9</sup>,  
ITSUMURA Hiroshi<sup>9</sup>, YAMADA Nobuhiro<sup>10</sup>

### Abstract

In the last decade, scientists are expected to present their researches. It is symbolized as the term: "science communications" and "inter-discipline communications." We suggest and explain "Presentation Competition of Graduate Students" (PCGS). In October 2011, we, Tsukuba Graduate students' Network, conducted PCGS during a university festival and proved its effects. As results, various multi-discipline communications have been promoted among University of Tsukuba. In our university, there are few cases of the collaborated researches which leverage the opportunities that the university has almost every discipline. In this paper, we suggest PCGS as a solution of the problems and demonstrate the details about the implementation plans, strategies and results. We also inspect the impacts as evaluations with the interviews of each concerned, *e.g.* speaker, judge and visitor. We expect that the PCGS will be held at other universities.

Keywords: science communication, inter-discipline communication, presentation competition

---

2012年3月15日受付 2012年5月9日受理

- 所 属: 1. 筑波大学 大学院 システム情報工学研究科 社会システム工学専攻  
2. 筑波大学 大学院 システム情報工学研究科 知能機能システム専攻  
3. 筑波大学 大学院 システム情報工学研究科 構造エネルギー工学専攻  
4. 筑波大学 人間学群 教育学類  
5. 筑波大学 大学院 図書館情報メディア研究科 図書館情報メディア専攻  
6. 筑波大学 大学院 数理工学物質科学研究科 物理学専攻  
7. 筑波大学 大学院 生命環境科学研究科 生命産業科学専攻  
8. 筑波大学 大学院 人間総合科学研究科 心理専攻  
9. 筑波大学 図書館情報メディア系  
10. 筑波大学

†. つくば院生ネットワーク

連絡先: 善甫 啓一: zempo@aclab.esys.tsukuba.ac.jp

## 1. 諸言

### 1.1 背景と目的

近年、学問領域の多様化や研究において扱われる問題の複雑化により、科学者や研究者は自らの専門の周辺領域あるいは全く異なる領域の研究者と協働する必要に迫られることが多くなってきた。こうした複数の分野を横断した研究活動の中では、しばしば新たな発想が生まれることから、科学のイノベーションを起こす大きな可能性を有している。このような状況を踏まえ現在では、多くの異分野コミュニケーションや科学コミュニケーション<sup>1)</sup>の必要性が高まり、全国の大学でも科学コミュニケーションが重要視されている。筑波大学においても科学コミュニケーションの意義が周知されてきている。

しかしながら、筑波大学では、構成主体である大学院生・学群生（他大学の学部生と同義）間における異分野交流が希薄で、総合大学の特色である学際性が十分に活かされているとは言い難い。つまり、様々な分野の学生が同一キャンパスに居り、学際的な交流をするポテンシャルを兼ね備えているにも関わらず、それが実現されないという問題を抱えているといえる。特に、各々研究分野を持ち始め、研究者の卵になった大学院生が、自分の専攻や研究室に閉じこもりがちになり、専門分野を越えた交流や情報交換を行わない、もしくは経験したことがないという学際性の乏しい生活を送っている現状は危惧すべき問題であると我々は考える。この問題は、「一部の学会や分野内のセミナー等を除くと、大学院生の学術的な交流の場がない」、「大学院生が分野を超えて学際的に交流を行っている前例が少ない」という所に端を発する。大学院生にとっての「学際的な交流」はイメージがしづらく行動を起こしにくいというのが課題といえる。さらに、これらの問題は「学際的な交流をするインフラがない」ということに集約できる。

そこで大学院生が主体となる任意組織である「つくば院生ネットワーク<sup>2)</sup>」(Tsukuba Graduate students' Network, 以下: TGN) が、多くの異分野コミュニケーションを活性化し、研究者以外の学生や一般市民も含めた科学コミュニケーションを図るため「院生プレゼンバトル」を企画・実施した。この企画は、筑波大学に所属する大学院生が自身の研究をわかりやすく魅力的に伝えるスキルを競う企画であるが、付随的に企画を通して知り合った大学院生同士や、大学院生と一般市民等のコミュニケーションの場を提供することを意図している。

本報告は、筑波大学にて行った「院生プレゼンバトル」という新たな科学コミュニケーションについて、その効果や評価を延べることで、異分野や科学に対する理解の場として「院生プレゼンバトル」が筑波大学外にも認知されること、また、このような企画が他大学などでも開催されるよう報告・提案することを目的とした。

### 1.2 大学院生をとりまく科学コミュニケーションの定義

科学コミュニケーションとは「研究者、メディア、一般市民、科学技術理解増進活動担当者、行政当局間等の情報交換と意思の円滑な疎通を図り、共に科学リテラシーを高めていくための活動全般を指している。」と、2003年に出された報告書の中で文部科学省科学技術政策研究所が述べている（文部科学省科学技術政策研究所 2003）。本報告では、研究者である大学院生を中心とした科学コミュニケーションについて述べている。コミュニケーションの対象を明確にするため、大学院生を中心としてコミュニケーションを大きく3つに区別し、下記のように定義した（図1）。

- (1) 科学コミュニケーション：一般市民や学群生（学部生）、高校生などを対象とした場合
- (2) 異分野コミュニケーション：異分野の大学院生・研究者を対象とした場合
- (3) 分野内コミュニケーション：同分野の大学院生・研究者を対象とした場合

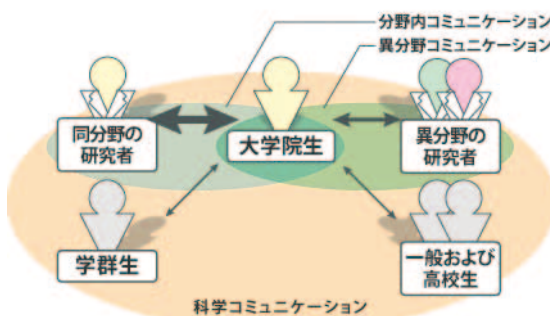


図1 本報告における大学院生を中心とした科学コミュニケーションに関する語句の扱い

## 2. 企画設計

### 2.1 院生プレゼンバトルとは

院生プレゼンバトルは、多くの分野の大学院生が自身の研究プレゼンテーションを披露することで、総合大学である特色を活かしながら異分野コミュニケーションを生み出し、一般市民に対しても科学コミュニケーションを行う場である。本企画は口頭発表部門とポスター発表部門の2つから構成されており、両部門共に後述する(1)の要件を満たすものをエントリー対象者とした。口頭発表部門は学園祭イベント最終日に、ポスター発表部門は学園祭イベント全日程を通して、発表が行われた。本報告では反響が大きかった口頭発表部門について述べる。口頭発表部門における発表時間・審査の内容を(2)に示した。なお、口頭発表部門、ポスター発表部門、およびその予選を含む本企画の設計については、図2に示す。

#### (1) 対象者

発表者として、筑波大学大学院生であることのみ参加条件とした(専攻や領域等は問わない)。筑波大学は多様な学問領域の教育組織を有している。その領域は理学、工学を始めとし、人文学、社会学、医学、教育学から、体育学、芸術学にまで至る。これは多様な異分野コミュニケーションを行う場として好条件であるといえる。

#### (2) 口頭発表部門における発表時間・審査員による採点

口頭発表部門では、ひとりあたり15分間の発表および5分間の質疑応答にて行った。時間の都合上、発表者は6名と定め、その6名は1週間前に予選を行うことで選出した。

口頭発表部門の特徴として、審査員による採点によって順位を付けた点が挙げられる。このような競技形式をとったことで、発表者に対しては発表の質の向上が見込まれ、一般来場者に対しては評価者として積極的な参加を促すことができた。副次的な効果として、企画自体のエンターテインメント的側面が強調され、学園祭という場に相応しい企画となった。

審査基準を表1に示す。審査員の持ち点は6項目に対し各5点の30点満点として、各発表者に対する最終的な得点は投票数で平均した値として算出した。

本企画では6名の発表者に対して審査を行い、順位を決定した。招待審査員、高校生審査員および一般審査員の3つの区分を設けた。招待審査員は17名であり、内訳は学長、副学長(3名)、図書館長、各研究科長(5名)および大学OB/OG(7名)である。高校生審査員は19名であり、近隣の高校に呼びかけ招待した。以上の区分に属さない来場者はすべて一般審査員とした。招待審査員による得点には一般審査員の得点の3倍の重みを付けた。高校生審査員による得点は招待審査員および一般審査員とは別に集計し、得点が最も高かった発表者に高校生賞を贈った。

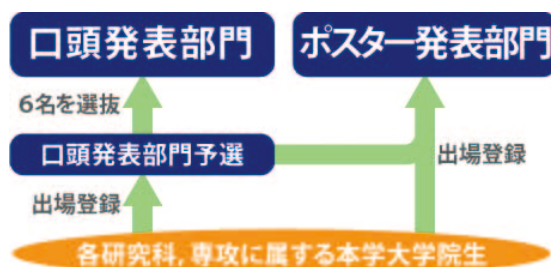


図2 口頭発表部門, ポスター発表部門, および予選の流れ

表1 審査基準 (各項目の持ち点は5点)

評価項目	評価のポイント
1. 発表の論旨・展開は明快であったか?	発表者としてのスキル
2. 身振り, 声量, スライド等に工夫があったか?	
3. 研究にオリジナリティが感じられたか?	研究者としてのスキル
4. 研究を通じて未来・夢を感じられたか?	
5. 発表に熱意・意欲が感じられたか?	全体評価
6. 発表が面白かったか?	

## 2.2 広報

科学コミュニケーションを促すため, 本企画では多岐にわたる層の人々に参加をしてもらう必要があった. 企画を行うにあたり, これらの人々が参加しやすい仕組みづくりに配慮した. 大学院生には「発表者」として, 大学関係者には「招待審査員」として, 学群生, 高校生, 一般市民などには「一般審査員・高校生審査員」として参加を促す広報を行った.

大学院生に対しては, 賞の贈呈と単位認定を行うことで企画への参加を促した. 表彰には, 筑波大学学長, 筑波大学附属図書館館長などの公印が押された賞状を用意し, 副賞としてタブレット型の電子端末であるiPad2を3台を用意した. また, 筑波大学大学院全研究科を対象にした授業 (小林 2011) である「異分野学生の協働によるコンテンツ開発演習」の演習トラックである「異分野間コミュニケーションのためのプレゼンテーション・バトル」 (担当: 逸村裕) と協働した. この科目は異分野向けの研究プレゼンテーション手法に関する講義, および, その実践として本企画へ参加することにより単位を認定するものである.

また教職員らの関与を促すため, 大学教員を審査員として招待した. 招待審査員は学長をはじめとする要職者が務めた.

さらに, 高校生・一般審査員全員に対しては, 発表者を審査する機会の提供をもって, 来場の動機づけをした. 特に, 高校生には近隣高校へ審査員としての呼びかけを行い, また高校生賞という独立した賞を設けることで積極的な参加を促した. 一般審査員に対しては, ポスターや立看板<sup>3)</sup>, チラシだけでなく, Webサービス (e.g. Twitter, Togetter, Ustream) を積極的に用いることで効果的に情報発信を行うよう取り組んだ.

### 3. 実施報告

#### 3.1 応募総数と所属の内訳

本企画では、発表者はWeb上に設置したフォームを介してエントリーを行った。エントリーに必要な情報は、氏名、連絡先、所属、学年、希望発表形式（口頭またはポスター）、発表タイトルの6項目とした。なお、本企画では指導教員の許可があることをエントリーの必須条件とした。これは、研究室の意向に反した研究成果の漏洩を防ぐためである。

エントリー者は、修士課程<sup>4)</sup>（博士前期課程を含む。以降「M1, M2」と表記する。）および博士課程（博士後期課程を含む。以降「D1, D2, D3」と表記する。）のすべての学年にわたった。このうち、M1が過半数の54%を占め、M2 (28%), D1 (11%) と続いた。7つの研究科<sup>5)</sup> からエントリーがあったが、それぞれの研究科からのエントリー者数には偏りがみられた。システム情報工学や数理物質科学といった工学・理学などの、いわゆる「理系」が過半数を占め、教育や人文社会科学といった、いわゆる「文系」のエントリー者数は少なかった。エントリー者数の推移を図3に示す。第1次エントリー締切日である9月17日（学園祭の3週間前）の直前に多数のエントリーがあった。最終的に、エントリー者数は46名に達したが、辞退や病欠などで2名は発表を行わなかった。

エントリー種別における「口頭発表のみ」または「口頭発表およびポスター発表の両方」にエントリーした発表者の合計数は39名であり、口頭発表を希望した発表者は全体の85%であった。エントリーのあった発表者の属性を図4に示す。各グラフは、(a) は学年別、(b) は研究科別、(c) はエントリー種別の属性を示す。

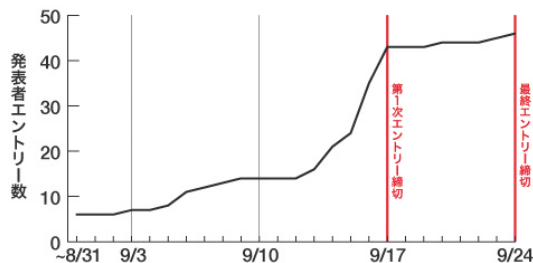


図3 エントリー者数の推移

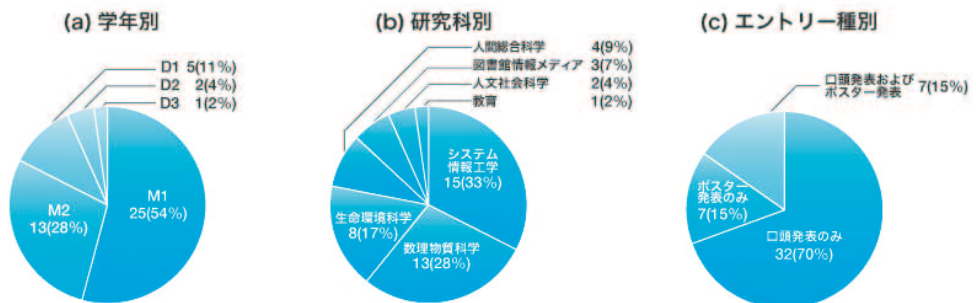


図4 院生プレゼンバトル発表者の属性



### 3.2 来場者数と運営

来場者に配付した投票用紙やアブストラクト集の数から、ポスター発表会場には約800名以上、口頭発表会場には約500名の来場を確認した。本企画は26名で運営された。口頭発表部門における集計は、発表毎に審査用紙を回収し、発表会場との映像中継で繋がった集計用の部屋で行われた<sup>6)</sup>。これは、一般審査員の構成が流動的であることと（会場は出入り自由としていた）、集計には膨大な時間がかかることが予想されたためである。

## 4 分析及び考察

本企画の後に、発表者、一般審査員、特別審査員へのアンケートや聴き取り調査などを行い、様々な立場からの意見を得た。その結果を、4.1 発表を行ったことの意義、4.2 アンケート結果およびWeb上での反響、4.3 大学への貢献の3つの観点に分けて下記で詳細に述べる。

### 4.1 発表を行ったことの意義

発表者である増生<sup>7)</sup>は次のように述べている。

「自身の研究をより広い視点の中に位置づけ、客観視できることは、院生プレゼンバトルでの発表を通じて、発表者が享受しうる最も大きなメリットであると考え、これについては、質疑応答やアンケートにより聴衆からの意見を得ることや、他の発表を聴くことによってなされた。特に学生にとっては、自身の研究を多様な知識背景を持つ聴衆に向けて発表し意見を得られる機会は非常に貴重であり、私にとっては当初の出場動機であった副賞以上の価値があった。」

ただし、質疑応答については改善の余地があると指摘している。

「実際、発表者と専門が近い方からの質問が多く、また学会参加経験がないと見受けられる方からの質問は少なかったと感じた。多様な知識背景を持つ聴衆が集まっていることを活かし、専門の壁を越えた議論および高校生や一般の方との議論がなされることは双方にとってより有意義であると考え、そのため、研究に携わっていない、あるいは学会参加経験のない聴衆が発言できるよう工夫することは、重要な課題だと言える。」

他の発表者からの聞き取りも含めると、本企画には課題が残るという指摘がありながらも、研究に関するプレゼンテーションを異分野および一般の人に対して、わかりやすく魅力的に行う技能を、実践を通して向上させる上で意義深いものであったという意見が得られた。

### 4.2 アンケート結果およびWeb上での反響

本企画では、予選に参加した発表者、口頭発表部門への当日来場者を対象としたアンケートを行った。また、2.2にも前述したようにWebサービスを積極的に取り入れることで、参加者からの本企画に対する多くの意見を集めた。本節では、アンケート結果およびWeb上での反響について述べる。

予選に参加した発表者を対象としたアンケートより、本企画に対する意見を得た。その有効回答数は21であった。集計結果を図5に示す。設問「(本企画を)どこでお知りになりましたか? (複数回答可)」, 設問「出場の決め手は? (複数回答可)」に対する集計結果をそれぞれ図5 (a), 図5 (b)に示す。これらの結果より、多くの発表者は「友人からの口コミ」によって本企画を知り、「先生や友人からの誘い」を一因として出場を決めたことが読み取れる。また、「立看板」を通して企画を知った発表者も「友人からの口コミ」に次いで多かった。設問「本企画についての感想 (複数回答可)」に対する集計結果を図5 (c)に示す。ここでは「異分野の研究を知れてよかった」、「興味深かった」、「面白かった」などの肯定的な意見が大半を占める一方で、「大変だった」、「難しかった」、「つまらな

い・退屈だ」という感想もみられた。設問「本企画は、学際的・横断的交流につながっていくと思いますか？」に対する集計結果を図5(d)に示す。ここでは「とてもそう思う」という回答者は19%で、「少しそう思う」という回答者は81%であった。「とてもそう思う」と答えたのが2割程度に留まったことで、大学院生の学際的な交流の場として本企画が果たす役割については課題が残ることが判明した。その一方で、いずれの意見も肯定的であったことは、学際的・横断的交流の促進を目的とする本企画の成功を示唆するものである。

口頭発表部門の当日来場者を対象としたアンケートより、本企画に対する意見・感想を得た。その有効回答数は166であった。集計結果を図6に示す。設問「(本企画を) どこでお知りになりましたか? (複数回答可)」, 設問「来場の決め手は? (複数回答可)」に対する集計結果をそれぞれ図6(a), 図6(b)に示す。アンケート結果より来場者の半数近くが「友人からの口コミ」で本企画のことを知り来場していたことが読み取れる。また、来場者の多くは「興味・関心」を理由に来場していた。設問「プレゼンの内容はどうでしたか? (複数回答可)」に対する集計結果を図6(c)に示す。これより、「面白い」、「興味深い」という回答は多く、図6(b)に示した多くの来場者の決め手である「興味関心」が満たせたことが示唆される。また、プレゼンについて「わかりやすい」と感じる来場者も多数いた。設問「本企画についての感想(複数回答可)」に対する集計結果を図6(d)に示す。「難しかった」という意見も見られたが、「面白い」、「興味深い」、「勉強になった」などの肯定的意見が多くを占めた。図6(e)に示す設問「本企画は学際的・横断的交流につながるといいますか?」における「とてもそう思う」、「少しそう思う」を加算した割合は92%にのぼり、これは図6(d)における「異分野の研究が知れてよかった」、「異分野との交流ができそうだった」という意見とも合致する。設問「今後、同様な企画があるとしたらまた来場したいと思いますか?」に対する集計結果を図6(f)に示す。ここでは「はい」という回答者が99%を占め、本企画に対する満足度が高かったことが示唆される。

本企画では、マイクロブログサービスTwitterによる情報発信と動画共有サービスUstreamによるビデオストリーミングを積極的に活用した<sup>8)</sup>。TwitterおよびUstreamを用いた科学技術コミュニケーションの事例については効率的・効果的な広報手段となりうることが指摘されている(佐藤2010)。予選会におけるつぶやきはTogetter<sup>9)</sup>(複数のつぶやきを1つのリストにまとめられるサービス)を用いて収集・公開されている。リスト中に含まれる異なる投稿者数は68であった。つぶや

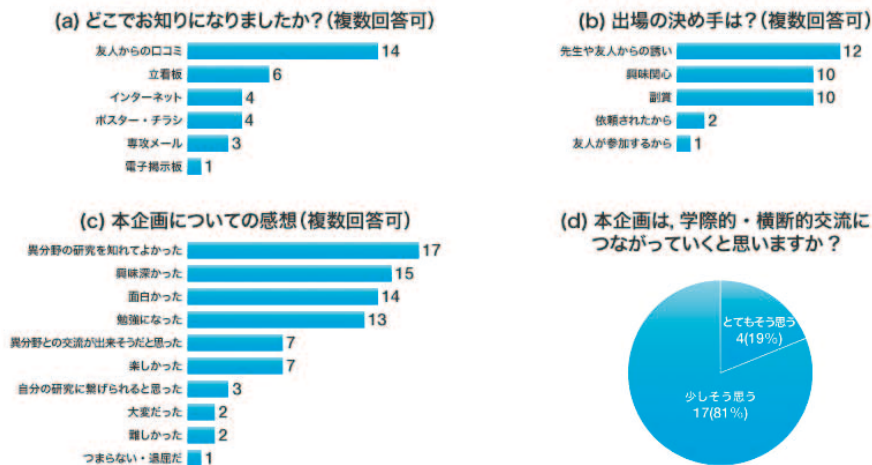


図5 発表者アンケート集計結果

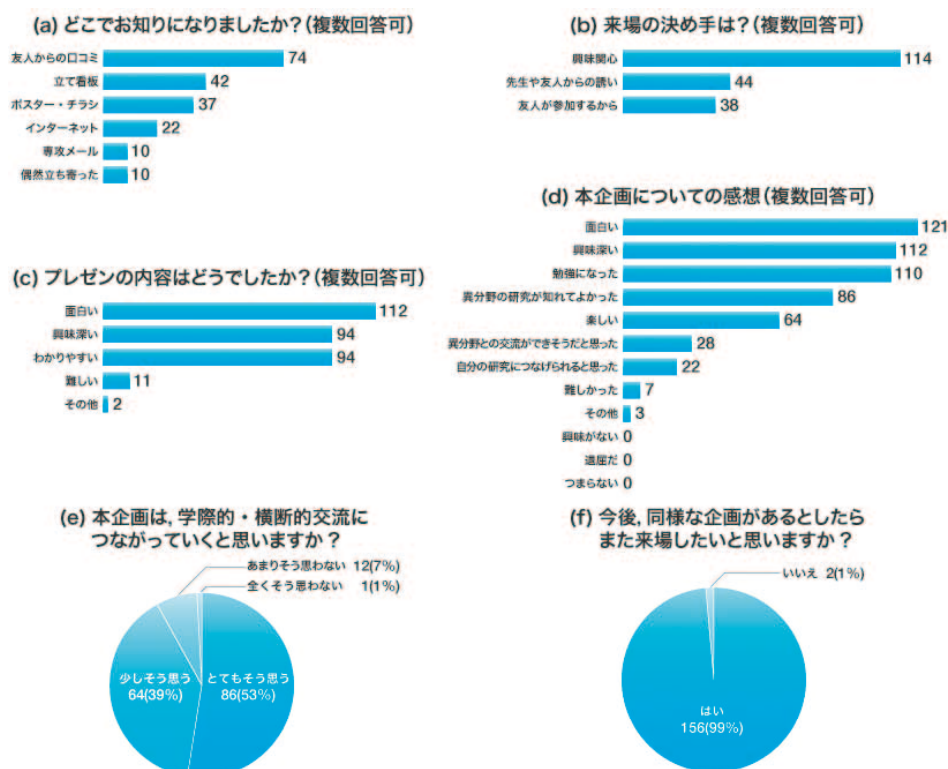


図6 来場者アンケート集計結果

きの内容は「面白い」など発表内容・企画主旨への好意的な反響が22件、「自分も行きたい」など参加希望意思の表明が5件、動画配信の要望が4件などであった。Twitterでの実況<sup>10)</sup>は企画主旨や様子を非来場者に伝える役割に加え、誘引効果を有していたことが分かった。また口頭発表部門当日はUstreamでの中継を行った。このサービスでは、アーカイブされた動画を後日視聴することもできる。最も視聴回数の多かった閉会式・表彰式は999回視聴されている(2012年4月25日現在)。このように、Twitterでの実況については予選で、Ustreamについては口頭発表当日で、それぞれ来場を誘引しており、また非来場者にまで企画主旨や様子を伝える役割を果たしていた。

以上より、院生プレゼンバトルが開催されたことで、学際的な交流をするためのインフラが学園祭において創出された。運営・発表者のみならず、来場者ともに科学コミュニケーションに参画できる場を共有することができたといえる。

#### 4.3 大学への貢献

院生プレゼンバトルは科学コミュニケーションを目的として行われたが、結果として筑波大学における大学教育の振興に貢献した側面も併せ持つ。ここでは、院生プレゼンバトルが大学の役割や教育に対して影響を与えたと考えられる点を述べる。

##### (1) 一般審査員として来場していた学生への教養教育

筑波大学の教養教育は「専門に偏することのない豊かな人間性と高い倫理の涵養」(筑波大学教養教育機構 2009)を目標として挙げている。本企画は様々な研究分野の発表が場を共有して行われており、専門に偏することのない豊かな人間性の涵養に貢献している。

##### (2) 研究成果の公開



大学の役割とは「学術の中心として、高い教養と専門的能力を培うとともに、深く真理を探究して新たな知見を創造し、これらの成果を広く社会に提供することにより、社会の発展に寄与する」ことである(教育基本法第7条)。本企画は一般に公開されており、筑波大学で行われている研究の成果を広く社会に提供したことから、大学の役割を果たすことに貢献したといえる。

### (3) 発表者の教育に関わる資質の向上

自身の研究内容を異分野の人にも理解しやすいように噛み砕いて発表することは、教育活動に通じるものがある。例えば、本企画において発表者は自身の研究内容を伝えとともに、審査員とのやり取りから伝え方を省みていた。教育活動においても、教師は教育内容を学習者に伝えとともに、学習者の反応に応じて伝え方を工夫している。本企画は発表者自身が有する教育に関わる資質の向上に貢献した可能性がある。

なお、招待審査員を務めた筑波大学学長である山田信博は次のように述べている。

「大学は教育・研究活動を通じて人材を養成し、新たな知を創造し、社会に貢献することを使命としている。直近では、大震災は私たちに多くの課題を突き付けた。大学は国づくりや、知識基盤社会の発展に中心的な役割を果たしてきたが、課題が山積みとなっている現実を直視すれば、社会が抱える課題の解決のためにより積極的な貢献、新しい動きが始まってしかるべきである。さらに、本学の建学の理念<sup>11)</sup>では『従来の大学は、ややもすれば狭い専門領域に閉じこもり、教育・研究の両面にわたって停滞し、固定化を招き、現実の社会からも遊離しがちであった。本学は、この点を反省し、あらゆる意味において、国内的にも国際的にも開かれた大学であることを基本的性格とすること』を述べている。今回の取り組みは、ややもすれば内向きになりがちな大学院の活動に対して、研究内容のプレゼンテーション能力を競うことを通じて、大学が最も大事にしている学術的風土の拡充と多分野間のコミュニケーションを活性化しようとする試みであり、そこから大学院生が多様な連携や対話を通じて、新しい芽を育て、自立した人材、グローバルな人材へと発展することを期待している。このような、新しい動きを積み重ねていくことにより、内向きといわれる私たちの意識の改革も動き出し、社会の課題解決を意識した大学への成長につながることを期待している。」

以上より、本企画は、研究成果の発信と、開かれた科学コミュニケーションを促進するものであり、筑波大学がその社会的役割を果たすことに大きく貢献したと考えられる。

## 5. 結言

本報告では、筑波大学学園祭において実施された院生プレゼンバトルという企画の報告を行った。その波及効果として、以下に示す3つの成果が得られた。

- (1) 発表者は、研究に関するプレゼンテーションについて、異分野および一般の人に対して魅力的に行う技能を、実践を通して向上させることができた。
- (2) 院生プレゼンバトルが開催されたことで、学際的な交流をするためのインフラが学園祭において創出された。来場者は審査員として運営・発表者とともに科学コミュニケーションに参画することができた。
- (3) 本企画により、筑波大学における研究成果の発信と、開かれた科学コミュニケーションが促進された。

## おわりに：

異分野融合の必要性が叫ばれる中、相反するように学問は細分化されている。筑波大学の大学院組織は8研究科57専攻<sup>12)</sup>にのぼり、自分の専攻と遠い分野を見る場合、名称を見ただけではその内容・差異はわかりづらい。その一方で総合大学という場では、異分野の研究を行っている人は近くにおり、密に学際的交流が実現できるはずである。そこで本企画では、競い合いを通して異分野に対する理解を促し、学際的交流を推進した。このような交流を当たり前に行える場こそが、大学(University)の本来の姿であり、大学は学際的交流を誘起する多くの科学コミュニケーションの場であってほしいと我々は考える。他大学においても本企画のような研究プレゼンバトルが開催されることを強く期待し、各大学関係者に提案する。

## 謝辞

本報告にあたり、他つくば院生ネットワークメンバー、加賀信広教授(人文社会科学研究科)、土子昇氏(学生生活課専門職員)、T-ACTの皆様、広報課、学園祭実行委員会、福井啓介氏(筑波大学附属図書館職員)に感謝の意を表する。なお、本企画運営にあたり社団法人茗溪会学生生活活動支援事業から資金援助を受けた。ここに記して感謝の意を表する。

## 注

- 1) 異分野コミュニケーションおよび科学コミュニケーション等の定義については後述1.2を参照。また、図1の中心を大学院生から研究者に変更すると理解できる。
- 2) つくば院生ネットワーク(TGN)は、主に筑波大学大学院に所属する学生によって組織される有志の団体であり2010年に発足した。TGNは、「科学技術立国の要である筑波研究学園都市を中心とし、豊かな世の中を実現する」という目標を掲げており、学術交流の場を増加させる活動を大学院生が主体となって行っている。
- 3) 約1.5 mの大型の立看板を作成し筑波大学構内の人通りの多い場所に設置した。立看板には口頭発表部門に出場することが決定した6名の大学院生の写真と発表タイトル等の情報を記載した。後述でも述べられている通り、立看板の誘引効果は大きかったことが判明した。
- 4) 修士課程(M)は博士前期課程、一貫制博士課程1～2年を、博士課程(D)は博士後期課程、一貫制博士課程3～5年を含む。
- 5) 筑波大学の研究科について、学問分野の大別は以下の通り。システム情報工学=工学、数理物質科学=理学、生命環境科学=理学・農学、人間総合科学=医学・芸術学・体育学、図書館情報メディア=図書館情報学を含む情報工学、人文社会科学=人文学・社会学、教育=教育学。また、これとは別にビジネス科学があるが、この研究科は東京都文京区にキャンパスを構えており、主に社会人対象であるため後述にある集計(図4)では対象から除外した。
- 6) 発表会場と映像の中継には、2.2および4.2で述べられているUstreamを用いた。
- 7) 埴生孝慈は本企画口頭発表部門の最優秀賞受賞者である。本企画の後にTGNの活動に合流した。
- 8) Ustream 大学院生学際研究フォーラム2011～院生プレゼンバトル～ <http://www.ustream.tv/channel/%E9%99%A2%E7%94%9F%E3%83%97%E3%83%AC%E3%82%BC%E3%83%B3%E3%83%90%E3%83%88%E3%83%AB> (最終アクセス日 2012.4.25)
- 9) 院生プレゼンバトル 口頭発表部門・本戦まとめ(大学院生学際研究フォーラム2011) <http://togetter.com/li/199237> (最終アクセス日 2012.4.24)
- 10) Twitter TGN(つくば院生ネットワーク) [https://twitter.com/#!/TGN\\_Account](https://twitter.com/#!/TGN_Account) (最終アクセス日 2012.4.24)
- 11) 筑波大学建学の理念 <http://www.tsukuba.ac.jp/about/concept.html>
- 12) 博士前期課程および後期課程において連続性があり名称が異なるだけの専攻は同一専攻として数えた。

●文献：

小林信一 2011:「筑波大学大学院共通科目の取組み：検討開始からの5年間」, <http://www.tsukuba.ac.jp/education/g-courses/pdf/torikumi5th.pdf> (最終アクセス日 2012.4.24).

文部科学省科学技術政策研究所 2003:「概要 科学技術理解増進と科学コミュニケーションの活性化について」, 報告書 調査資料No.100.

佐藤祐介 2010:「講演会の生中継:「新しい中継」の科学技術コミュニケーションにとっての可能性」『科学技術コミュニケーション』, 7, 177-184.

筑波大学教養教育機構ホームページ 2009:「筑波大学における教養教育の目標」, <http://www.ole.tsukuba.ac.jp/?q=node/2> (最終アクセス日 2012.4.24).